



ほけんだより

平成 25 年 第 154 号



子どもの事故

わが国で 0 歳を除く子どもの死因の第一位は、不慮の事故です。子どもは、その発育・発達段階に応じた様々な危険にさらされています。また、事故の直接的な原因の影にはいろいろな潜在危険があることを理解しておきましょう。

誤飲



誤飲した物質の中で一番多いのはタバコ、続いて医薬品、化粧品、洗剤、殺虫剤の順です。日本では畳での生活様式があり、様々なものが畳や床の上に置かれています。赤ちゃんは生後 5 ヶ月を過ぎると手にしたものは何でも口に持っていきます。

タバコ

ニコチンの急性致死量は幼児でタバコ 1/2~1 本分ですが、ニコチンが溶け出すのに時間がかかり、胃内でほとんど吸収されず、吸収されてもニコチンの催吐作用により吐き出してしまうため、重篤な症状になるのは稀です。

しかし、タバコが浸かっていた液体を飲んだ場合は、すぐに体に吸収され重篤な中毒症状を示します。タバコを誤飲してしまったら、すぐ吐かせることが原則です。

防止するには…

- 乳幼児の環境からタバコを一切なくすこと。
(あるいはタバコを床から 1m 以下の場所に置かない。)
- ジュースの缶などを灰皿がわりに使ったりしないこと。

タバコを 2cm 以上、あるいはタバコが浸かった水を飲んだ場合は医療機関を受診して下さい。



気管支異物



気管支異物は乳幼児に多く、3 歳以下が約 8 割を占めます。最も多いのはピーナッツで、気管支に入ると呼吸困難、肺炎などを起こす可能性があります。すぐに取り出さねばなりません。

3 歳未満の乳幼児にはピーナッツなど、乾いた豆類、ピーナッツを含んだせんべいやチョコレートを与えないようにしましょう。

防止するには…

- 寝たままや歩きながら物を食べさせないようにする。
- 揺れたり、急停車する可能性のある乗り物の中で豆類を食べさせないようにする。
- 小さな食物塊やおもちゃを放り投げて口で受けるような食べ方や遊びをさせないようにする。
- 食事中に幼児がびっくりするようなことは避けることも大切です。



窒息

窒息は、瞬時に発生し、5～6分間気道が閉塞されると死亡することもあります。こんにゃくゼリーが有名ですが、ある程度の大きさや硬さがあるものが窒息の原因になります。



大急ぎで食べたり、よくかまずに飲み込もうとしたときに詰まらせがちです。食事は時間をかけてゆっくりと食べさせましょう。

防止するには・・・

- ・ 4歳未満の奥歯のない時期の子どもに対して、食物を小さくするなど調理の工夫をする。

できすい 溺水



わが国の特に1歳児の溺死死亡率は非常に高く、その80%は家庭の浴槽の中で発生しています。小さな子どもではバケツ、ビニールプール、洗濯機などでもおぼれます。

溺水は死亡率が高いのみでなく、救命できても低酸素状態に陥った脳への重い後遺症が残ります。やすいのです。

防止するには・・・

- ・ 残し湯の習慣をなくすこと。
(洗い場から高さが50cm未満の浴槽は転落の危険性が高い)
- ・ 浴室の入り口に鍵をかけるなど子どもが入れないよう工夫する。
- ・ 子どもだけで風呂場で遊ばせないこと。

やけど



子どものやけどの80%は家庭内で起こり、そのうちの50%は台所で起こっています。

つかまり立ちができるようになると、背伸びをしてテーブルの上のものに手を伸ばし頭から熱湯をかぶったりします。

1, 2歳ではストーブやアイロンに触れたり、テーブルの上の味噌汁、コーヒーをひっくり返したり、床に置かれた炊飯器の蒸気に触れたり、ポットを誤って押して足に熱湯をかけたりします。4歳を過ぎると花火によるやけどが多くなります。

防止するには・・・

- ・ 家庭の熱源は1mより上に置くことが原則です。
- ・ ストーブには柵をし、花火をするときには必ず大人が付き添いましょう。

子どもが7, 8ヶ月から2歳まではやけどをする最も危険な時期と認識しましょう。

【安全管理と安全教育について】



子どもの事故防止対策は、大きく分けて安全管理と安全教育に分けられます。子どもの年齢が低いあいだは安全管理大切ですが、1歳前後から安全教育をすこしずつ行うことが可能です。子どもに何が危険なのか、どのように危険なのか具体的に教え、どうやったら安全に行動できるか身をもって覚えさせることが必要です。子どもの発達段階に応じて環境を整備したり、安全教育をし、豊かな生活体験をさせることで、自主性の豊かな、事故の少ない子に育てましょう。

ほけんだよりは、呉市のホームページでもご覧になることができます。

URL <http://www.city.kure.lg.jp/~kodosise/hoken.html>